

談 話 室

予 備 校 と 大 学

田 村 均

一 はじめに

私は、今年四月に香川大学に赴任するまで、大学院博士課程とオーバードクターの合計五年間を、幾つかの予備校の講師をすることによって生活してきた。予備校は、「受験産業」という別称がいくらか軽侮のこもったものであることから判るとおり、その実態についてまじめな関心が寄せられることは少ない。しかし、共通一次試験が実施されて、大学入試が全国の受験生の学力水準の統計調査なくしては成功を期しがたいような広域的なイベントとなって以来、予備校が大学入試情報を提供するほとんど唯一の重要な機関になってしまったことは誰もが知るとおりである。私が予備校の講師として見聞したことはわずかなものにすぎないが、そのなかには、大学人にとっても無関係ではないような事柄も含まれていると思われる。以下に、私の狭い体験の範囲から、簡単な報告をこころみたい。

二 情報産業としての予備校

— 「受験産業」批判に関して —

まず最初に、予備校に対する一般的な批判の当否について、思うところを述べておきたい。

現在、予備校が批判されるのは、主として今述べた情報提供者としての機能に関してである。いわゆる「偏差値」という化け

物を予備校が作り出した結果、受験生はこの数値だけによって大学を評価するようになり、各大学は、偏差値にしたがって、いわば学生の配給を受けるといったような不愉快な状況が出て来ている、と言われる。

事実、このような状況は存在する。従って、この批判は部分的には当たっていないこともない。現在行われている入学試験よ、どの大学のものをとっても、同じタイプの修練によって熟達することが出来るような内容であり、そして、それぞれの大学に合格するためにどの程度の熟達が必要とされるかは、さまざまな理由によって、現実それぞれで異なっている。この相異を偏差値というかたちで予備校があげてしまうと、ある大学には試験に対するほぼ決まった程度の熟達を達成した生徒だけが集まることになる。だから、予備校さえ静かにしていれば、どの程度の熟達度(実力!)があればどの大学に入れるのかということの判定のもとになる情報が存在しないことになるのだから、一つの大学にいろいろな学生が来ることになって、喜ぶべき結果が得られるということになる、はずである。そこで、予備校は不必要に受験情報を流しすぎる、という批判が成立するわけである。こうした批判が生まれるのは、たしかに無理もないことだが、この見解そのものが全く正当というわけではないように思われ

る。なにより、本質的には、偏差値というような一律の尺度によって序列化できるような試験を、多くの大学が採用しているというところにこそ根本的な問題があると見るべきであろう。しかし、このことはさしあたって取り上げないことにする。これは、にわかにはどうしようもないことである。

さて、上に述べたように、予備校が余計なことを言わなければ大学に「いろいろの学生が来る」という時には、普通、試験に対する熟達の程度の低い学生が来ることを期待しているわけではなくて、よりその程度の高い学生がやってくることを期待しているであろう。各大学に合格するために必要とされる熟達の程度は、先にも述べたとおり、現実には互いに異なっている。だが、予備校さえ静かにしていれば、この相異が受験生に知られずにすんで、「いろいろの学生が来る」というわけである。

とすると、ややどぎつい言い方が許されるならば、予備校が受験情報を流しすぎるという批判の裏に在るのは、現実に存在する差異を適当に隠蔽することによって、事態を好転させようという考えである。予備校の圧倒的な情報提供力を目の当たりにすれば、たしかに無理もない考え方ではあるが、全面的に正しい考え方ではない。あるいは、少なくとも現実的な考え方ではない。実際、よほど強力な統制措置でもとらないかぎり、現実に存在する差異はかならずあらわになる。つまり、受験生のさしあたって知りたいことは予備校その他の機関が何としてでも探り出してしまおうだろう。

ほんとうは、大学はなんら入学試験の難易度の情報を隠す必要はない。大学は、「良い」学生に来てほしいのであって、必ずしも「試験に対する熟達の程度の高い」学生に来てほしいのではない（と信ずる）。こ

の二つのものの中身が少しく違うことを認めるならば、試験に対する熟達の程度は多少低くても、「良い」学生を求める、という方針が提起されてよいのである。つまり、「〇〇大学は、入るのはそれほど難しくないので、中でやっている教育・研究ははなはだ興味深く、おもしろいものばかりであり、来れば絶対に得るところのある素晴らしい大学である」という情報をどんどん流布させれば、原理的には、事態は改善されるはずなのである。

ただし、原理的には、という保留を付けて、このように簡単に言い切ってしまうことには多少問題が残る。現実的には、しかじかの大学がどんなに素晴らしい大学であるか宣伝してみても、なかなか人は動かされない。すでに、大学というものの価値は、その実質のありようではなく、世間の評判のありよう（偏差値その他）にすぎないことになっているかもしれない。とすると、逆に、原理的に、上に述べたやり方ではうまくゆかないことになる。

が、私は、まだ、大学が受験生にとってここまで空虚な存在になっているわけではないと判断している。その理由は、簡単に言えば、受験生たちは、現在でも案外に純粹であり、昔の受験生と同じく、自分の将来について夢を持ったり夢破れたり、いろいろ悩んでいるということが有るからである。大学になんらかの実質的な内容を求める気持ちは相当強い。今の子は全員しらけているというのは多分ウソである。

仮に、こうした受験生の立場にたってみると、大学というところは奇妙ののっぺらぼうな存在に見える。〇〇大学と△△大学とがどんなふうに関連しているかということを知ろうとしても、入試の難易度としての偏差値以外の情報は極端に限られていて、

たとえば香川大学に入ったらどんなことが出来て、どんなことが出来ないのかという、本来はもっとも重要な情報がなかなか得られない。その結果、偏差値だけによる志望校の決定という歪んだ事態が生じて来る。予備校その他が偏差値でもって受験生を煽るから、というだけではなく、それ以外の情報があまりにも限られているから、こういう事態が生じる。このことは否定できないだろう。だから、予備校が偏差値というかたちで大学に関する情報を提供するなら、大学は、これとは別に、それぞれの大学の実質的な内容を広く一般に知らせることをもって応じるのが有効なはずなのである。

これはそれぞれの大学自体にしか提供できない本質的に重要な受験情報であり、受験生が本当に知りたいことであり、また、高等学校や予備校の進路指導の担当者が知りたいことでもある。要するに、受験生にじかに接してみると、入試制度を改変したり難易度の情報を隠蔽したりするという方法によってではなく、大学の方からもっと積極的に情報を提供することによって受験生を魅きつける必要が随分あると感じられるのである。

「受験産業」の情報戦略に対する批判は、偏差値を割り振られている個々の浪人生や高校生の実感からするかぎり、十分に理由がある。統計数値によって自分の知的能力（の一端）が示されるというシステムは、場合によっては（すなわち、個々の受験生が、統計数値というものを真面目に受け取ってしまう場合には）腹立たしいものである。だが、大学という、入学試験の実施者が、受験生とおなじレベルで偏差値その他のシステムを批判するだけというのはいただけない。みずから重要な情報を提供することによって受験の現実介入するほ

うが実りが大きいに違いない。

すなわち、受験情報は過剰なのではなく、過少なのである。予備校が受験情報を流しすぎるといふ批判は、受験情報の種類の偏りを指摘している側面では、正しい内容を含むといつてよいが、受験生の大学にむかう姿勢がひとり予備校のせいであまり望ましくない方向に動いていってしまうという趣旨であるならば、誤りを含むといわねばならないと思われる。

三 教育事業としての予備校

— 予備校という教育システム —

予備校にも「教育」があるなどと聞くと、全く笑止千万と思う人もいるかもしれない。予備校とは、大学に合格するという上昇志向だけを支えにして受験技術をガンガンたたきこむところにすぎず、目的達成のためにはすべてをなげうつといった非人間的な姿勢を強制するような反教育的な場所にすぎぬと思う人もいであろう。世の中は広いから、ひょっとするとこういう馬鹿げたやりくちの予備校がないことはないかもしれないが（なんといつても、私が実際に知っている予備校はたった四校 — 自分が生徒だったのをいれても五校 — にすぎないから）、こういうイメージは、予備校という場の本質を完全に誤解したほとんど空想的なものだといつてよい。

予備校は、現代の教育制度の外にはみ出た、生徒が主人となった学校である。もちろん、大学受験の準備をはじめ、知的な分野の活動については、講師が指導者である。だが、指導者が同時に主人（つまり上位者）である必然性はない。だいいち、どんなに偉そうに指導をしても、生徒を確実に大学に送り込む力は予備校講師にはないのである。これと比較してみると、自動車教習所

の教員などははなはだ権威と権力をもった存在である。ライセンスが欲しければ教員の言うことを聞かなければならない。が、大学に入りたければ講師の言うことを聞け、というのは怪しげな宣伝にしかすぎず、大学入学のライセンスは予備校が与えるものではない。この事実は、だれもが知っているが、なにかを教えてある種の資格を与えるという普通の学校の機能を顧みると、予備校に固有の不思議な現実であることに気づかされる。

予備校の生徒は、自分にとって無意味だと思われる授業には出席する必要はない。そんなものに出席してみたところで、全く厳密に無意味である。我慢しても得るものはなにもない。だから、生徒が役に立つと思ふような授業をとりそろえることだけによって、予備校は存続することができるのである。いかにヴェテランの講師が俺の授業は君たちの役に立つと強く主張しても、生徒たちがこれに納得しないかぎり、彼の教室は無人になってしまう。生徒に見捨てられた予備校講師というものは、永くは存在できない。つまり、ひらたく言えばクビになってしまう。(予備校では、非常勤講師はもとより専任講師にも毎年契約更改がある。だから、次年度は契約せずということも当然ある、のである。) ある面での指導者であるということがそのまま別の面での上位者であるということになるわけではない、というのはこういうことである。

それでは、はてしなく生徒の要求に迎合するという方針が有効かという、迎合する者もたいてい見捨てられる。十八、十九の若者はおおむねそれほど賢くはないが、それほど馬鹿でもない。彼らは、実に、受験勉強ばかりが大事なわけではないということを理解できる程度には賢いのであって、

だから、冒頭に述べたような上昇志向いっぽんやりの予備校がかりに存在したとしても、賢い生徒には見捨てられ、ボンヤリした生徒しか残っていない予備校にはもう誰も来ない、という末路をたどる可能性が大なのである。

すると、結局、予備校の講師は、みずからの信ずるところを授業を通じて訴えることをとおして生徒の心をつかむほかないのである。そうしなければ、教室は無人の荒野となり、講師の命は風前の灯である。たとえば、よく言われるように受験勉強というのはいろいろな意味で弊害の多い営為であると思ったら(ほとんどの予備校講師が多かれ少なかれこう考えているのだが)、ありうる弊害を隠して生徒を勉強に駆り立てたりするという欺瞞を行ってはならない。そういうウソに人は敏感なものである。むしろ、害を明らかにし、それを避ける方策を述べ、避ける方策が無ければ無いで、それでもやはり自分はしかじかの点で批判的である、というように語ったほうがよい。でない、最も重要な、信ずる者の迫力というものが、講師の言葉から失われる。そして、自らの信ずるところが(もし有るとして)生徒達に受け入れられなかったら、彼は、悔い改めるか、あるいは、黙って立ち去るかしかないのである。

教える側に最終的にはいかなる権力もないということは、実質において、以上のような関係を作り出す。これは、ある意味で、芸能の世界の芸人と客の関係に似ている。しかし、これはまた、理想的に事態が推移する限りにおいて、すなわち、生徒の側に迎合的な教師や欺瞞的な教師を見破る力があり、自分に必要なものを自立的に選択する能力がある限りにおいて、「教育」の名にふさわしいなものかである。

念のために付け加えておくと、これは必ずしも生徒に高い判断能力を要求することにはならない。生徒たちの判断は場合によっては衆愚制の様相を呈する。しかし、予備校のシステムが機能するために必要なのは、「選択する」能力であって、「正しく選択する」能力ではない。間違った選択の結果、優れた講師のクラスに生徒が集まらなかったら、困るのはまず講師の方であり、生徒の方は後でやり直せば足りるのである。大学受験浪人というのは、いずれにせよやり直しの期間である。

巨視的に見れば、こうした構造も全体としての現代の受験体制のなかにつつまこまれているのであって、その分だけ「教育」の美称も割り引きする必要がある。受験のシステムによって不必要に打ちのめされたり精神を破綻させたりしている受験生はやはり存在し、そういった犠牲者の数は予備校関係者の目にはなかなか見えてこない。受験というシステムに対してある程度の距離を保つことができ、その限りで、自分の判断によって予備校から与えられる「教育」を取捨選択することができる受験生にとってのみ、予備校は教育機関の一種となっているだけである。(予備校は、そのシステムを十分に機能させようとするならば、生徒が受験ということにある程度の距離をもって接することが出来るようにはかり、生徒が自立的判断力を身に付けるようにしむけるほかない。これは微妙に逆説的な事実である。)そしてまた、こうした生徒達の自立的判断が怠惰に流れて彼らが衆愚と化すことをある程度防いでいるのが、社会的制度としての大学受験の強制力であることは確実である。つづめて言えば、生徒が賢く振る舞うのは世間様のおかげであって、予備校だけの手柄ではない。

しかし、たとえそうであるとしても、予備校という場所が、日々の教室での出来事という微視的な水準で見るかぎり、生徒と教師の通常の力関係が逆転した不思議な宇宙になっていることは本当である。もちろんこのことは、予備校講師と生徒とが厳密に対等であるということから生まれてきている。講師は、文部省やPTAはもちろんのこと当の予備校の経営方針とさえ無関係かつ独立に、好き勝手なことを授業で述べる自由を持っている。生徒が彼を支持するというのがすべてである。生徒は、そういう話が聴きたくないと思ったら、別の講師の授業に出るだけのことである。こうした単純な仕掛けがうまく働くと、教室は随分厳しくも楽しい場所になる。これは、現在の公の教育の反転画像とでもいえるかもしれない。

四 むすび

私の目に映ったかぎりでの予備校という存在のありようは以上のようなものである。もちろん個々の予備校には教育上経営上いろいろな問題点がある。また個々の受験生にも学習上生活上いろいろの問題点がある。個々の予備校講師にはさらにいろいろな問題点がある。しかしこれらは厳密にその当事者の問題である。

また、現行の受験システムの中では、生徒も講師も予備校組織もそれぞれの立場で競争相手をかかえていて、それぞれ優勝劣敗の原則に従ったはげしい生き残り競争にさらされている。人間の生きる環境として、このような状況は、たしかに世間ではありふれたものにすぎないが、やはり、一般に好ましいとは言えない。だがこれはわれわれの社会システム総体の問題というべきかもしれない。

近年、小学校から大学に至るまでの公の教育が管理主義の色彩を強めるのにつれて、予備校が、いわば管理の網の目からはずれた奇妙に自由な空間として、逆説的な関心を、とりもなおさず生徒から寄せられる、という事態が生じている。時には「予備校の講師になるにはどんな大学に行ったらいいのか」というような質問が受験生から寄せられることさえ有るのである。予備校と

いうもののイメージは、少しずつ変わりつつある。それは公の教育のイメージの変化に、屈折した形で呼応している。これは、まさに、およそ教育に携わるもの総てにとっての問題である可能性がある。予備校というシステムを観察することは、多くの教員にとって無駄ではないと思われるのである。

転 校 生

矢野智司

1

「さはやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪袴をはいた二人の一年生の子がどてをまはって運動場にはひって来て、まだほかに誰も来ておないのを見て、「ほう、おら一等だぞ、一等だぞ。」とかはるがはる叫びながら大悦びで門をはひって来たのですが、ちょっと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合せてぶるぶるふるへました。がひとはたうたう泣き出してしまいました。」

宮沢賢治の『風の又三郎』の冒頭部分である。ここには転校生のもつ余所者(Stranger)の性格がよく描かれている。この九月一日という日はいうまでもなく新学期の始まる日、境界時間である。この移行していく時間の裂け目に、余所者は突然現われる。『風の又三郎』は突然の転校生＝余所者の出現に対する子どもの関係の原型を描いているという点で傑作といえる。後

に続く転校生をテーマとした文学作品の雛型を示しているといつてよい。そして、この作品の優れている点は、おとなの「現実」と子どもの「現実」との違いを明らかにしているところにある。つまり教師にとっては、今度、転校してきた子どもの名前も、親の仕事の都合で転勤してきたことも、書類の上で明らかにされている事実として了解されている。他方、子どもにとっては、転校生は風を自由に扱うことができる、そしてガラスのマントにガラスの靴を履いた風の又三郎である。そのことは最後に教師が子どもたちに彼がまた転校していったことを告げたとき、子どもたちが「やっぱりあいつは『風の又三郎』だ」というところからも明らかである。しかし、なぜ私達は転校生の物語を持つことになるのか。

2

この転校生の神話の生じるのは、転校生の生活が子どもには見えないからである。言いかえれば転校生とは秘密を持つ存在で

ある。教師にとっては転校生のこれまでの生活歴や住所、家族の状態すべてが「わかっている」。しかし子どもにとっては、それらはすべて隠されており現実はまだ目の前にこれまで見たことのない子どもが立っているということである。誤解してならないことは、このことは四月に新しく学校に入学するときに、子どもたちが体験することとは同じではないということである。そのときには、すべての子どもは学校という集団の文化的パターンを知らないという意味において、同等に余所者である。そこから新しい共同性が子どもと教師によって作りだされるのである。しかし、転校生の場合には教室の共同性はすでにできあがっており、教室の子どもはすべて顔なじみである。その内部に転校生は共同体とは異質の外部の者として入ってくる。転校生はその学校、教室の隠された儀礼や、様々な自明の処方箋を知らないがゆえに、共同体の日常のもつ自明性や絶対性をおびやかす存在である。

3

このようにみれば、転校生は異人である

とも考えられよう。民俗学の知見はこの事象にどこまで届くのであろうか。

4

ところで、今日、転校生は子どもにとってどのような経験なのであろうか。帰国子女の問題とも関係するであろう。転校生はよくいじめの対象にされているとも聞く。学校という奇妙に歪んだ近代空間における様々な事象の解説という作業は、教育学の危急の課題であろう。

5

さてこの私も、やはり転校生というべきであらうか。しかし、巡礼者という異人たちを、古来より厚く遇してきたこの四国の地では、異人として殺されることもなく、受け入れられているように思う。「接近集団の文化的パターンは余所者にとって避難所ではなく冒険の領野である」とシュッツは言ったが、余所者としての「特権」？を利用して、私もこの地を冒険しようと思う。

顧 頡 剛 の こ と

間 嶋 潤 一

武田泰淳をはじめとする諸家が、既にその学説を詳細に紹介し、また近代中国史学史に於けるその意味などについても論じられており、ここで今更ことごとしく言挙げするつもりは毛頭ないが、顧頡剛のことに書いてみようと思う。わが敬愛する

学者であるからだ。

顧頡剛（1893～1980）、現代中国を代表する古代史家である。— 死後の今日でも彼の遺稿が続々と出版されており、その学説は絶対的な権威を持っているようだ— 彼は郭沫若率いる所謂社会史派と旧国学打

倒の為に共同戦線を張った疑古派のリーダーであった。かかる立場をとる彼の学問は「禅讓伝説起於墨家考」という一篇の論文に端的に集約されている。

周知の如く、禅讓説話は、堯から舜、舜から禹へと政権が交替した故事である。儒家はここに革命の理想像を見出した。即ち旧国学に於いては、この禅讓説話は歴史的事実であり、批判の対象となる荒謬性など認められようはずもなかったのである。かかる禅讓説話を顧頡剛よりも先に、社会史派の郭沫若が祖上にのぼす。禅讓説話は母系制時代に於ける族長選挙制をその基盤として成立した、と指摘するのである。ここに禅讓説話の偶像性は破壊されたかのようであった。けれども、郭沫若の論理操作は形式的に過ぎ、実証性を欠き、そして何よりもイデオロギーが先行していた。そこを顧頡剛が衝く。「禅讓伝説起於墨家考」を著すのである。郭沫若の資料抛用の脆弱性を批判するわけだが、結論を一言を以て蔽わばこうだ。戦国時代初期の墨家によってその中心綱領たる尚賢主義を宣伝するために作られた故事が堯舜禅讓説話なのである。墨家がいわば世論をアジる宣伝パンプを権威付けるものとして捏造したというのである。かかる結論に達するまでの論理操作は実証主義・批判主義にのっとる周到さで、郭沫若の如くドグマにはしらず、あくまでも理性の光に基づくものだ。結論は今日に於いては少々問題はあるかもしれないが、ここに於いてはじめて旧国学の迷蒙性の一端は暴露されたのであった。

時恰も、中国は暗黒時代であった。列強の中国侵略は日々厳しさを加え、内では血で血を洗う軍閥同士の醜い争い、学問に集中することのできる環境では全くなかった。にもかかわらず、顧頡剛は、右の論文をは

じめとした、迷蒙性に覆われた旧国学に対する極めて戦闘的な執筆活動を行うのである。注意せねばならないことは、顧頡剛のそれは時代から意識的に逃避した、いわば象牙の塔での学究態度ではなかったことだ。とまれ、かかる真理のあくなき追求、そして学問に対する情熱を、自ら編んだ『古史弁』第一冊の劈頭に置く「自序」に於いて彼は我々に語りかけてくれる。

その『古史弁』第一冊の中扉の次に、顧頡剛はロダンの言葉を引く。彼はいかなる気持でこのロダンの言葉を読んだのであろうか。

深く、根強く、真理を語る者となれ。君の感ずる事柄を言い表わすのに決して躊躇してはならない、たとえ君が世の抱き慣れた思想に対峙する時であろうとも。君は、初めのうち、理解されないかもしれない。しかし、君の孤立はつかの間であらう。同志の人たちは間もなく君のところへ来るであらう、なぜなら、一人の者に深く真実である事柄は、万人に真実であるから。

〔芸術についてロダンの遺した言葉〕

附記

顧頡剛に関する諸論文の中で、武田泰淳「疑古派か？ 社会史派か？」（中国文学月報19）を特に参照した。石母田正「中国の歴史家について—竹内氏に—」（続歴史と民族の発見所収）も併せて見た。なお、『古史弁』「自序」は平岡武夫氏によって翻訳されている。上のロダンの言葉も平岡氏の訳による。

ず い そ う

小 林 立

“ 活 性 化 ”

“去る者は追わず”と言うが、“割愛”という言葉を書く度に、ある種の衝撃と一抹の寂しさを覚えるのは、恐らく私一人ではあるまい。“逃がした魚は大きい”と言われるが転出される教官は、事実やはり光った存在であるのが通例であろう。割愛される程の教官を擁していることは誇るべきことであるが、それだけ当該教室の損失と打撃も大きいのではないと思われる。教官の採用には多くの時間と労力が費やされたに違いないが、それはさておいても転出された教官の欠員は新任教官の募集によって補充されるだろうから人事の年齢構成が崩壊するのみならず、あたかも教官養成機関の如き様相を呈することにもなるのではあるまいか。むしろ、“流れる水は腐らず”と言うし、人事の移動は意義のあることであるが、引き抜かれる側の大学にとっては、その研究・教育体制ひいては大学全体の士気にも微妙な影響を深く静かに及ぼしてゆくだろうことは間違いないのではなからうか。

大都市圏から赴任される新任教官には、一般的に言って、地方の国立大学はどのように映るものであろうか。地元出身の教官であれば故郷であり、地縁・血縁という強い絆もあるから終着駅という気持ちも持っているに違いない。だがそれでもなお都落ちという感慨は免れ得ないかもしれない。まして余所者の教官であれば新参者でもあるからまた異なった感想があって決して不自然

であるとは言えないであろう。何年かして実際に転出して行かれる教官にはやはり地元出身者よりは余所者の教官の方が多いことも事実といってよいだろう。しかしまた“任めば都”という言葉もある如く、余所者ではあるが転出に対し免疫性をもつ教官も少なくないことも事実であろう。地元出身ではないが四国近辺の出身者であるとか、配偶者が地元出身であるとか、大都市圏より地方の都市が性に合っている等々、理由は種々様々であるに違いない。

定年前の退職勧奨の制度や定員削減などもあるが、大学教官は定年までその大学で勤めることができると言ってよいだろう。従って、大都市圏から赴任された新任教官をして己れの人生の三十数年間をその大学の研究・教育に賭けてもよいという気持ちをもたせるような魅力なり条件なりを大学としては不断に整備している必要があることは言うまでもないし、折角、赴任された気鋭の教官を一人でも多く擁していることが大学の活性化にとって必須の要件になることも改めて言うまでもないことであろう。新任教官にとって三十数年間といえば気の遠くなるような長い時間である。それ故、“淀む水には芥溜る”といった警句もあるのだろうが、その間、大きな間違いもなく、常に意欲に燃えて研究・教育の路を邁進し大成することを期待されているわけであるから、実に至難の業であると言って間違いはないだろう。

“事業は人なり”と言うが、大学もその例外ではあるまい。人間集団が活力に満ちて維持・発展するには三つの条件が必要だと言われる。一つは募集力、二つは教育力、三つは定着力の三つであるという。新進気鋭の教官を迎えることは募集力の範疇に入ると言えるが、着任後は教官集団内部の公式・非公式の人間関係をはじめ大学内外における諸々の関係などが有形無形の教育力として作用すると言ってよいのではないか。殊に同系列の教官集団との人間関係や様態は、新任教官にとって自己の将来像を描く上で活きた見本として映るに相違ない。従って客観的には教官集団は新任教官からも評価されているわけである。新任教官と先輩の教官とは一世代以上の年齢の開きがあると言えるだろうから、新任教官が嘴の黄色い青二歳に映っても当たり前であろう。それ故、生意気なと思われる点も多いことだろうが、“名馬に癖あり”とも言う。従っ

て、そこは“年の功”により適宜の助言なり指導なりが求められているに違いないだろうし、また“出る杭は打たれる”とか“足をすくう”とかいう言葉もあるが、“角を矯めて牛を殺す”より、むしろ絶好の刺激剤として活かす志向が期待されていると言ってよいのではないか。

教官が大学を去る場合には、定年退職・転出・懲戒免職・死亡などが挙げられるが、その大学に奉職している限り、意欲的に研究・教育に取り組むことが何にもまして大学の活性化の基盤になるものと言ってよいだろう。募集力・教育力・定着力は緊密に関連しており、いずれを欠いても活性化に支障を来たすに違いないが、大学の国際化が強調され、“世界に開かれた大学”であることを期待される今日、気鋭の教官の定着力こそは大学全体の水準を高める最も重要な鍵であると言っても過言ではないのではなかろうか。

“^{くつは}前車の覆るは^{いさめ}後車の戒”

“失敗は成功のもと”と言われるが本当だろうか。失敗は権威を失墜させ、信用を失なわせ、嘲弄のための標的を創り出すだけに違いないし、一度失なわれた権威や信用は二度と取り戻すことが出来ないことは言うまでもないだろう。従って“失敗は成功のもと”どころではなく、失敗は連鎖的に失敗を呼ぶというのが普通であろうから、むしろ“失敗は失敗のもと”という方がより適切な表現ではないのだろうか。失敗には個人・集団・国家と次元も内容も異なるものがあろうが、失敗は当事者の社会的生命を終了させる点で共通しているだろうし、場合によっては生物的生命も終りになるの

が常態といってよいだろう。それ故、“失敗を恐れよ”とか“失敗は許されぬ”という警告の方が“失敗を恐れるな”という激励よりも現実的であり価値のある言葉と言ってよいのではないだろうか。

“過ちては改むるに憚ること勿れ”といわれる。過ちや失敗は所詮“天知る、地知る、我知る、人知る”ものである以上、大事にならないうちに改めるのが身のためであり賢明であると言ふべきである。しかし失敗を失敗として自覚できなければ、“二度あることは三度ある”とか“歴史は繰り返す”といわれるように同じ失敗を性懲りもなく繰り返すことになるに違いない。そ

れにまた物事には勢いがあり、個人的次元の失敗であっても墮ちる所まで墮ちなければ止まらないし、それが非行であることすら自覚しない場合には途中で軌道修正することなど思いもよらないという一面もあるに違いないのである。従って、もし失敗が成功のもとになるとしたら、それは後に続く人々が前車の失敗を直視して冷静に教訓を学びとり活かすことによるのみ“失敗は成功のもと”に転化させ得る性質のものであると言えるのではないか。

“男子、家を出れば七人の敵あり”といわれる。従って過ちや失敗は“七人の敵”に対してつけ入る隙を与えるに違いないし、“江戸の敵を長崎で討つ”機会を提供することにもなるに違いないだろう。“弱み”をつくれれば敵の餌食になるのみならず、味方を当惑させ、甚大なる迷惑をかけ、友人を失うことになるに違いない。過ちや失敗の中でもとりわけ素行上の失敗はもっとも幼稚でしかも破廉恥な性質のものであると言えるに違いないだけに人間的に侮蔑と愚弄の対象となることは間違いないし、“臭い物に蛆がたかる”ような状況に陥ことは必至であろう。

ところで“捨てる神あれば拾う神あり”といわれる。従って、たとえ“ポロ”であったとしても、ポロ弁護派は必ず存在するに違いないから、人間はやはり“社会的存在”であるといわれる所以であろう。ポロの処置を巡って、ポロ追放派とポロ弁護派の間で喧々囂々たる論争が繰り展げられるに違いないが、初めからポロ弁護派の立場は分が悪いことは明白であろう。従ってポロ追放派とポロ弁護派の間で何らかの妥協が成立して結論が出るとしたら、恐らくポロ弁護派はポロ追放派に対して何か大きな譲歩をせざるを得ないだろうことは想像に

難くないのではあるまいか。無論、ポロは判断力と責任能力ゼロという評価にもとづいて論争の圏外におかれるのは当然であり、欠席裁判に処することによって妥当な判決が下されることになるに違いない。ポロの自覚と立ち直りを期待するとすれば、多分、それが唯一・最善の措置といってもよいのではなかろうか。欠席裁判の判決の内容は、ポロ本人に通告する必要はないし、当人の与り知らぬ判決ということも出来るに違いないからである。かくてポロ論争には一応の結着がつけられることになるだろうが、第三者の立場から見ると、“臭い物に蓋をする”という本質には変りないし、ポロ自身は“知らぬが仏”でいるわけであるが、“タダほど高いものはない”といわれるように、ポロ自身も何らかの相応の“罪の償い”をしないわけには済まないことも常識であると言ってよいに違いない。

ところでまた失敗や過ちは当事者の“失点”になるわけであるが、一方において“七人の敵”の“得点”になるという冷厳なる現実があることも否定できないのではないだろうか。従って、“他人の失敗ほど愉快なことはない”といわれるわけだろうし、他人の失敗や過ちを待望するだけでなく、更にまた積極的に失敗や過ちへ誘導しようという工作が進められるようなことがあるとしても、それは“万物の霊長”ならではのことと言って間違いないだろう。

“経験は最良の教師である。ただし授業料が高すぎる”といわれる。従って、もし道徳教育の重要性が強調されるとすれば、それは人間が人間として人間らしく生きる上で、無用の失敗や過ちを未然に防ぐための武器になり得るという点にこそあると言ってよいのではないだろうか。

講道館柔道、タイを往く — その7 —

村 田 直 樹

前号迄のあらずじ。

タイ柔道協会道場へ挨拶に向出したその日、いきなり黒帯八人を相手に連続の勝負（＝八人掛け）を挑まれた私。それも一人から三本取る、という……。

柔道場の誰もが練習を止め、異国ビトに凝視される中、私は勝負を余儀なくされた。

組み際から勝負を賭ける、と短期決戦の戦法をたてる。長引いてはいけない。何しろ問題は、熱帯の熱さが敵のスタミナなのだ。

試合開始。

一人、二人、三人と、猛烈な勢いで右に前にと投げ続けるも、六人目あたりで息が苦しくなり、スタミナに赤ランプ。それでも頑張てどうにか八人目までできた。一本取り、二本目も投げ、そしてあと一本の三本目、寝技となる。うつ伏せの相手の背後から、私は絞技をねらって相手の首に手をかけた。と、その瞬間、相手は私を背負ったまま、渾身の力をふり絞ってうつ伏せの状態から身を起こし、膝立ちに立ってそのまま勢いよく後ろへ仰向けに倒れてきた。ドゥッと音がして、二つの身体が仰向けに重ね餅。私は相手の下で、後頭部をしたたか打った。

（この野郎、反則じゃないか！）

と内心叫ぶも東の間、グワーンと脳震盪が襲い来て、そのまま何も分からなくなってしまった。

* * *

直ぐ目の前に、何やら浅黒い肌のヒトの

後頭部がある。圧迫感があり、私の身体は仰向けで、浅黒い肌のそのヒトが、これ又同じように仰向けで私の身体に乗っていた。誰だこいつは、重いじゃないか。

ワァワァワァ。ワァワァワァ……。

ざわめき声が近く遠く聞こえてきた。

— そうだっ。俺は戦っていたんだ。

ハッと意識が戻った。

— 反則だ。反則をやられて頭を打ったのだ。

そう記憶が蘇ったら、闘魂がメラメラと燃えてきた。

自分の身体が下にある。仰向けのその上に相手の身体が乗っている。よーしっ。下から攻めるか。それとも上に回って上から攻めるか。戦術は唯一つ、絞技のことしか頭になかった。絞め落としてやる……！

（注：落とす＝首を絞めて気絶させる、の意。この意味に於いて、柔道の用語と言ってよい。）

私は残忍な鬼神と化した。

上に回って馬乗りとなり、正面から十字に絞め、相手の苦悶の顔をたっぷり拝んで落とそうか。

重大な反則をされて頭に来ていた。

それだけじゃない。その反則をとらぬ審判にも腹立たしかった。私はそれまで七人を勝ち抜いてきた疲労困憊で（一人から三本ずつ！）最早、理性を失っていたようだ。

下敷きから脱して私は、首尾よく上になる。馬乗りになったら、相手は両腕を突っ張ってきた。関節技の絶好のチャンス！柔道を知る者ならば誰もがそう思ったろう。

しかし私はそれを無視した。

ああ、この時私はハッキリと、自分が今、勝負師とはなっていないことを知らされた。勝負師の目的は何であろうか。それは勝つことである、最効率で。だから勝つチャンスがあれば逃がさず、機を敏に勝負する。そして最小の努力で目的を達成する、がプロであろう。

私はどうしたか。

目の前に転がり来た勝利の機会を意図的に無視したのである。自分の胸元に伸ばされてきた相手の腕を関節技に取ることなく、そのまま放置した。取れば優に十字固めで一本取れ、そこで決着がついて、法外な八人掛けも終わったであろうに。

相手を攻める私の額から、汗がポタポタと落ちていた。馬乗りの私と下の相手の目が逢った。突っ張る相手の両腕に分け入らんと私は上体を押しゆき、相手の両肘を屈した。問答無用の強引な中央突破策。

相手も負けていなかった。

私の圧力で屈せられた両肘を、もの凄い力で押し伸ばす。まるで起重機。私の胸元に当てられていた手がいつの間にか移動して、どうも苦しいと思ったら、こちらの喉仏を押ししていた。

この野郎っ、また反則じゃないか。拳で喉を突くんじゃないっ。

怒髪衝天。私は我を忘れたか、馬乗りで相手の胸倉をつかんだまま透かさず横に転がり、自ら下になっていった。そうするが速いか、今度はそこから自分の片脚を正体する相手の肩口にサッと掛け首を巻き、もとより伸びている相手の腕の片方を引っ張り込み、ガッチリと極めたり三角絞。それだけではない。引っ張り込んだその腕を、グーッと肘を逆にした。

ギャーッ。

阿鼻叫喚七顛八倒。苦悶でクジャクジャの顔。私は構わず、渾身の力を籠めて絞り上げた。

アオーギャーッという咆哮にも似た唸り声を聞いたと思った瞬間、相手が急に重くなった。失神したのである。

私が、相手の首に巻きつけた脚を解いた時、相手の身体がドサッと私の上に落ちてきた。口元に泡を吹いて。

私はあわてず、浅黒い肌の失神した敵の身体を退け、黙って立ち上がった。

ハハハハハ。(やったぞ……………)

私は大きく肩で息をした。足元に背を見せて失神している相手を見下した。観衆はこの光景に息を呑んだ。先刻より審判をしてきた協会長は、怒りに目を三角にして、射らんばかりに私を睨んでいる。唇が震えていた。

気が付いて見たら、私の柔道衣は乱れ、胸が開けていた。その胸は、まるで水でも浴びたように汗びしょり。熱さの中で私の心臓は鳴りっ放しだった。

しかし場内はこの時、シンと静まりかえっていた。

このまま帰ろうか、と思った。失神して足元に倒れる相手もそのままに。放って置けばいつか息を吹き返すだろうと冷酷だった。

しかしそれもほんの少しの間のもので、次の瞬間、私は腰をかかめ、背を見せてノビている相手を仰向けに起こし、日本伝来の活法を施した。

蘇生 —。

相手は虚ろな表情で私を見た。二、三秒後破顔一笑。仰向けのまま、ニッコリ笑った。笑顔の中のこぼれるような歯の白さが素晴らしかった。彼は立ち上がり、汗を拭って握手を求めた。私は荒い息遣いのまま、

差し出された彼の手をしっかりと握り返した。

ヤレヤレ。終わったようである。

柔道衣の乱れを直し、整列するタイの黒帯八人と最後の礼を交す。この時観衆から、大きな拍手が湧き起こった。

負けないで良かった。引分けられないで良かった。何しろ暑さが心配だった。もうやらないぞ、こんな事……。

この八人掛けをじっと観ている青年が居た。彼は柔道衣を着ていなかった。観衆の笑い声にも声援にも別段耳を貸すふうでもなく、後ろの方でじっと見詰めていた。

八人掛けが終了し、私が群衆から解放されてシャワー室へ向かっている時である。眼鏡の奥の瞳を輝かせ、その青年が来て言った。

「アチャーン ナオキ。サワッディクラブ。」(直樹先生、初めまして。)

合掌する掌底が、額の所まで持ち上げられていた。

「サワッディクラブ。クン チューアライナ クラブ?」(こんにちわ。どなたですか。)

と私もタイ語で応じる。

「クン ブーットゥ タイ ゲング!」
(タイ語がお上手ですね。)

と直ぐに賞めてくるところは、何処かの国の人とそっくりの対応だ。いやいや、それ程でも……と答ええない。お賞めにあずかり有難し、と簡明直截に応じるのが向こうの遺取。

「コブクン クラブ。」(有難う)

彼は言った。

「ボム チュー スリチャイ=ワンケーオ。」
(私はスリチャイ=ワンオケと申します。)

「私は今、貴方の試合を観ていた者です。」

「疲れたでしょう。一度にあんな風に戦うなんて。」

「でも、一度に八人も相手にして戦うその目的は何なのでしょうか。」

私は返答に窮した。言葉が見つからなかったのは、私の貧しきタイ語のせいばかりではなかった。その訳は、柔道の方では新しき場所に赴任の際、大抵の場合、五人掛けが行なわれ、それは殆ど常識に近かったからである。

青年は続けた。

「貴方の強さの誇示ですか。八人相手にしても負けぬ、という。柔道は見世物ですか。」

「いや、そういうつもりでやったんじゃない。挑まれたんだ。だから受けたんだよ、その挑戦を。」

「でも、受けずに済ませることもできたでしょう。」

「……………」

私は協会長の挑戦的の眼差を想い出していた。挑戦されたその時、やるか、と思った。次にしかし、とも思った。そしてそのしかしは、熱帯の暑さに負けるかも知れぬ、だからよそうか、という計算だった。この計算とは詰まる処、負けるのならイヤ、というプライドが前提されているものだろう。そしてさらに、挑戦された、逃げないぞ、という内なる声もまたプライドであったろう。

八人相手にしても負けないという強さの誇示ですか、と聞いたこの青年の声が、汗だくの私の脳裡にずんずん込み込んできた。しかし、何故か、言下にそうだと答えられなかった。

青年は続けた。

「それにしても暑かったでしょう。四月、

五月はタイでは一番暑い季節なのです。日本は新緑の、一番過ごし易い季節でしょうね。」

よく知っているじゃないか。

そりゃー暑かったよ。苦熱さながらで、逃げ出したい程だった。しかし私は、初対面のこの青年に、内なる声とは全く反対のことを言った。

「いや、何かに熱中している時は、暑さ寒さを忘れてるよ。」

「ハハハ。タイ人はいつでも暑いことを忘れません。」

私は続けた。

人間の五感があてにならぬことは、日常しばしば経験するところである。夢中で何かをしている時、暑さ寒さは気にならないし、懐の暖かいヒトも居れば、師走の風が身に沁むヒトも居よう。気の持ち様だ。心頭滅却すれば火もまた涼し、の言葉もあると一。

「面白い言葉ですね。日本人はその様に考えるのですか。精神力を強調するんですね。その言葉について、もう少し聞かせてくれませんか。」

とんだご発展と相成った。しかし私も引かず突っ張った。

この言葉はですネ、信長に焼き打ちされた恵林寺の快川国師の言葉として有名なのだ。

織田・徳川連合軍の猛攻で、武田勝頼は居城を捨てて敗走し、菩提寺の恵林寺(山梨県塩山市)に逃げ込んだ。この寺の住職、快川和尚が包囲軍の目前で、燃える山門の楼上に端座し、泰然自若としてこの言葉を唱えながら焼死したことで有名になったのだ。

雑念を払い、無念無想の境地に到れば、熱い火の中に在っても熱さを感じず、かえ

って涼しさを感じるものだ、という意味だよ。

原典がある。中国六世紀の詩人、杜荀鶴の詩がそれだ。

『三伏、門を閉ざして一衲を披す。兼ねて松竹の房廊を蔭^{のう}ら^ひ無し。安禅は必ずしも山水を須^{もち}いず。心頭を滅却すれば火自ら涼し。』

青年よ、分かるかい。

炎暑の季節なのに師は門を閉め切り、破れ衣をまとっていられる。庭には蔭をつくる樹木もない。しかし坐禅には、別に静かな山中や水辺でなくてもよいのだ。師の様に、心を空にすれば、火の様な暑さも苦にならない、とそういう意味さ。

じっと青年は聴いていた。

そして正直に、よく解りません、と口を開いた。無理もない。私は、以上の話を日本語、英語、タイ語混じりでやったのだから。意が十分通じ得た、とは誰が聴いても思うまい。

私はしゃべりながら、言葉の重要性を痛感させられていたものだ。日本人のみを相手にした、日本人向けの作業なら、唯々日本語を道具にしていればそれでよい。しかし、こと国境の枠を外すなら、何よりもまず言葉じゃないか。理解も誤解もまず、言葉、言葉、言葉から、と一。

青年との再会を約し、私は独りシャワー室へ入って行った。

ジャージャーと頭を叩くシャワーの水が、火照った身体に快かった。私はしばらくそのままでした。

あの青年は一体私に何を言いたかったのだろう。その思いが、シャワーの雨の中で私の脳裡を掠めていた……。

つづく

